

地震と縄文

—編集長のひとり言—

※この度の地震や台風・豪雨などの自然災害で被災された方々に、心よりお見舞いを申し上げます。



写真・文：まほろば編集部 島田 浩

リアルな平安

それは突然やってきた。

台風一過の翌朝未明、ガタガタと大きな音を立てる激しい揺れに襲われ、飛び起きた。

「地震だ！」急いで家族を起しテーブルの下に潜り込む。何度か余震が繰り返される度、揺れる大地に祈った。

地震が収まった早朝、窓を開けると、風に乗って小さくささやくように虫の声が聞こえてきた。停電でTVもラジオも何もない、車の音さえ聞こえない。その、シーンとした静けさの中に、確かに平穏が息づいていた。そこには地震の恐怖も、生存への恐れも、何もなかった。

自然との心地よい一体感、それは子供の頃感じていた、あの空気感と言えよだろうか…。そしてそれは、縄文の頃、人々が感じていた自然への畏敬と心の自由さだったかもしれない。

ラジオがつき、甚大な災害の様子がわかるにつれ、心の平安はゆっくりと離れていった。それと同時に、今まで目の前には無かったはずの恐怖と不安が、静かにひたひたと心に押し寄せてきた。それは「情報」がもたらしたものだだった。

生命を守る上で「情報」が役に立つのは言うまでもない。しかしながら、「情報」は、今この目の前にある事ではなかった。心に感じたあの平安は、決して幻などではなく、ラジオの情報以上に、リアルではっきりとしたものだった。

真実の幸せとは？

二日後、電気が戻り、TVがついて歓喜した。電気もまた、ありがたいものに違いなかった。ふたたび普通の暮らしを取り戻すことができることに感謝した。

しかし、心のどこかで、そのいつもの暮らしに潜む危うさを知ってしまった事に気づいている。この文明社会は、本当に私たちに平安を与え続けてくれるのだろうか。

無数に天を埋め尽くす星々。今まで見たことも無い様な、色濃く横たわる天の川…。全道ブラックアウトという稀なる機会が与えてくれた、美しい星空を見上げながら、文明を得るために失ってしまったものの事を思った。

はたして私たちはいま、本当に心から幸せなのだろうか？

物質を得ることが幸せなのだ、と思わされてしまっただけではなからうか？

何のために身を粉にして働き、何を得ようとしているのだろうか。

そうして得たものは、つかの間の幸せを与えてくれるかもしれない。しかし、大風や地響きの前に、一切が無に帰してしまうのだ。



何もない朝の、その静けさの中に垣間見えたのは、もしかしたら本当の幸せに通じる小路だったかもしれない。

私たちはこれからいったい、何を目指してゆけばよいのだろうか…。そんな思いを心に突き付けられた数日だった。

多発する災害

ここ数年頻発する、自然災害。それが今年には毎月のように、毎週のように、私たちを襲う。いったいどうしたことだろうか？

たまたま本で目にしたホピの予言には、こんな言葉が書かれていた。

「第4の世界の終焉の予兆は、自然災害の多発である」。その言葉に背筋が寒くなった。

「平和の民」を意味するというホピ族は、アリゾナ北部に住むアメリカ先住民の一部族であり、大精霊から授かったという神話と予言を代々継承してきた。そこには白人の到来や、飛行機や車、電話の登場、大地から採掘されるウランや、それによってつくられた原子爆弾のことまでが描かれている。これまで第1から第3に至る3つの世界が人類の蛮行により、創造主によって破壊されてきており、このまま人類が物質への欲望を満たす生き方を続けたならば、現在の第4の世界が終焉につながる地球規模の大災害が起こり、大いなる清めの日が訪れるそうだ。しかし、その日までに人間の考え方や行いが変わること、その内容も未来も異なってくるという。『ホピ「平和の民」から教えてもらったこと』天川彩著 徳間書店他参照

いったい私たちはどうなりたいのだろうか？

幸せは目の前にすでにあるのに、外にある幸せのようなものを求めて、わき目もふらず働き続けてきた。そうして生み出してきたモノや価値観が、地球を壊し、世界を破滅に向かわせようとしている矛盾。その方向性を変えることは、もはや無理なのだろうか…。

先住民が減りつつある理由とは？

自然と一体となって暮らす、素晴らしい精神文化を持った先住民族たち。それなのに、どうして彼らは次々と征服されてしまったのだろうか？

文明の利器がもたらす決定的な力の差があったことや、単純に彼らが素直で人をだますことを知ら

なかったという理由ばかりではないように思うのだ。ここ数年、何度も考え続けてきたが、答えを見つけれずにいた。

地震が収まった後のある日、突然、風呂の中で思いついた。

すべては「バランス」なんだ、と。

宇宙に陰陽があるように、文明と自然、田舎と都会、戦争と平和、

男と女、縄文と弥生、そして、科学や物質文明と、先住民の持つ精神文化…。それらは、バランスされる必要があるのだ。どちらか一方に偏ってはだめなのかもしれない。

きっと、宇宙は進化しようとしているのではないだろうか。けっして過去に戻ることを望んでいるわけではないと思うのだ。「バランス」の中にこそ、ほんとうの進化が生まれるのではなかろうか。昼と夜があって地球の循環があるように、物質と精神のバランスにこそ、生命が活かされる道があると感じた。この宇宙に科学の存在が認められているように、先住民文化の精神性も認められているのだ。

物質だけでも、精神だけでも、どちらか一方だけではだめなのだろう。0-1テストが過度な肉食でも肉食でもなく、中庸のバランスを示すように、まほろばの新店舗設計で、右回りと左回りの黄金比の組み合わせから、無限に広がるハートが生まれたように、大切なのはバランスだったんだ。

物質に偏った現代文明は、ホピの予言を見るまでもなく、このままでは破綻に向かうことだろう。私たちは、もっと先住民文化に学んで、自然や地球と共生できる本質的な考え方や生き方、精神性のバランスをとり戻さなければならないのではなかろうか。



日本人が持つカギ

実は、私たち日本人は皆、そのカギを持っている。それは私たちの中に眠る縄文のDNAだ。

縄文文化の研究をしている考古学者、瀬川拓郎さんの著書『縄文の思想』（講談社現代新書）によれば、全国の海岸部に今もその痕跡や風習が残されているという。

狩猟漁撈のほか多様な生業に特化し、海のルートを用いて、南は九州・沖縄・朝鮮半島から中国・東南アジアまで、北は北海道・サハリン・ロシア沿海州まで交易を広げたという古代海民や縄文人。その面影はアイヌや沖縄に色濃く残されているが、彼らは突然消え去ってしまったわけではない。江戸人が急にいなくなって明治人になったわけではないように、縄文人もゆっくり弥生文化を受け入れ、混交し、同化して、私たち日本人というものの中にひっそりと今も息づいているのだ。

私の中にある、見知らぬ土地への興味や、旅への関心も、手仕事や芸術へのあこがれも、みな、もしかしたら縄文の遺伝子からきているのかもしれない。そう思ったら、何かとても腑に落ち、スッキリとした。なぜ、自分が先住民たちの文化や自然に惹かれるのか、その理由がわかった気がしたのだ。



問題を生む分離の心

縄文をはじめとする先住民文化の特徴の一つに、あらゆる動植物などの生命や山海などの自然、鍋などの物質にさえ神を見出し、兄弟姉妹として共存共栄してきた思想がある。とりわけ縄文は、一万五千年もの長きにわたり争うことなく平和に生きてきたようだ。お金による交換をベースにした資本主義が当たり前と、私たちは思っているが、そうじゃない。先の瀬川氏によれば、縄文から連なるアイヌや家船漁民^{えぶね}はお金による交換を忌み嫌い、「贈与の経済」によって暮らしていたという。すべては天から与えられたものだから、分け合うのが当然なのだ。

ところが、私たち文明国と言われる世界の住民には、あまねく分離の心が染みついている。個人主義を中心とする西洋的なその考え方は、お金やモノがすべてという物質主義を生み出し、いまや日本人の考え方そのものになってしまった。これまで何度か書いてきたが、この分離意識こそが、あらゆる問題を生み出す根になっている。自分と自分以外に違いがある事で、問題が起きるのだ。

本当は分離などない

想像してみよう。仮に私たちが縄文のように、分離を超える心を持たたとしたら、どうだろうか？

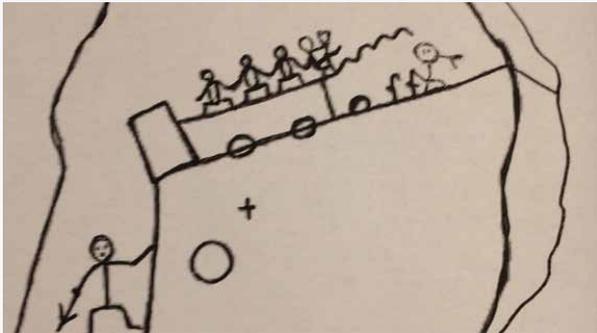
身分の低い、高いも、人種や国さえも、さらに動物や植物とさえ分離していないと私たちが思えるようになったなら、世界はいったいどうなるだろう？

実際、何一つ分離しているものなど、この世にはないのだ。私たちは自然の仕組み、すなわち地球の運行と宇宙のめぐりが生み出す、この星の空気と、水と、食物で生かされている。何ひとつ欠けても私たちは存在できないのだ。

私たちは水であり、空気であり、木や草や魚や獣や野菜なのだ。川でもあり、山でもあり、太陽と、月と、星々と、それらすべてそのものなのだ。何ひとつ、分かれているものなどない。それが私たちがなのだ。

それなのに私たちは、すべてのものが自分とは別だとすっかり信じ切って暮らしている。そういう差別や分離によって、この社会は成り立っているともしえる。しかし、それではダメだよと、自然は災害という警告によって、私たちを真実へと導こうとしてくれているのではなからうか。

ホピの予言の石板には、私たちに残されたもう一つの道が描かれている。それは、大地の上で人とトウモロコシ（自然）が共に描かれた、永続する世界の図なのだ。



1904年に制作されたホピ族のロードプランと言われる岩絵。上の線は物質文明に翻弄され欲にまみれ生きる道、下の線は謙虚につつましく生きる道とされる。上は途中で断たれ、下はその先まで続いている。下の線にある二つの丸は過去の世界大戦だといわれる。三つ目の丸は清めの日とされ、その前に上下をつなぐ道がひとつ残されている。

イメージの力を取り戻す

人には想像する力が与えられている。今、目の前にあるものは、かつて誰かが想像する事によってもたらされた。能力に大小の差はあれど、誰もが平等にその力を持っている。ただ、その使い道を、時代の空気という目に見えないものにコントロールされ、自然に反する方向にミスリードされてきただけ。あるいは封印され、まったく使われないようにされてきただけに過ぎない。私たちは誰もみな、その力を持っているのだ。

縄文やアイヌ、世界の先住民たちが、その呪術的力を使っていたように、今に生きる私たちも、その力を取り戻したらいい。使い方を間違えぬよう気を付けて（他者に対して成すことは自らに成すことだから）、子供のような無垢な心で、望む世界を純粋に夢見てみよう。楽しんで想像し、そのイメージに浸ってみよう。

誰もがみな兄弟姉妹として、人も自然も、国と国も、すべてが自分であるように、他をいたわり助け合う、思いやりや、やさしさを持つ社会。高度な文明に見合うだけの、高い精神性を持つ人々が暮らす世界。それは私たちの心の中に生じ、やがて現実のものとなる事だろう。人の想像力とは、それほど強力なものなのだ。怒りでこの星を破壊することだってできるし、いっしょに世界を変える事だって夢じゃない。私はそう信じている。

さて、誰がそれをするのだろうか？

世界を少しでも良いものにしたいと思う人なら、誰でもがイメージしたらいい。その小さな力がやがて世界を動かす時が来るのだ。世界と私たちは、いつだってこれっぽちも離れていないのだから。そして、何よりも自分自身がそのような人であるよう、謙虚に心掛けていきたいと思う。

火と水の融合

先週、熊本から「^{はなとり}花鳥村のお茶」でお馴染みアンナプルナ農園のオトさんとラビさんがやって来た。皆で交流し、阿蘇の火と、北の水が交わって、これまでの封印が解かれる時が来たように感じた。縄文のエナジーが解き放たれる、その時が来たのだ。文明と精神性のバランスがとれるその時が。

それは地震というエネルギーの神聖さがもたらしてくれた恵みでもある。多くの悲しみを生み出した災害ではあるが、それによって気づき、目覚める人が少なからずいる事だろう。阪神も3.11も、熊本も、多くの人々が本当に大切なものは何かに目覚め、行動を変えた。それは実に神聖なエネルギーなのだと思う。

今回の地震も、ブラックアウトもそうなのだろう。それは宇宙の大元の意識に帰る時を告げられている。

オトさんとラビさんが訪れてくれたのもその一つ。アイヌたちの大地であった北海道と、多くの縄文遺跡が出土する熊本。それぞれ縄文の記憶を持つ土地の、そのエネルギーを解き放つ時が来たのだ。それは日本の、世界の、いたるところで始まりつつあるのだろう。

私たちの中には、まぎれもなく、その古代のDNAが宿っているのだから。



アンナプルナ農園オトさん（右）とラビさん（左）
撮影：まほろば編集部 齋藤恭兵